

歌集『ゆふすげ』etc. 高山邦男

上皇后美智子さまの歌集が出版され大変評判になっている。皇室にとつては、今でも新年歌会始めを含めて短歌は重要な役割を果たしている、象徴としての皇族と国民を結ぶ言葉という意味合いがあるのだと思う。万葉集の最初の歌は雄略天皇の御製とされる作品で臣民を想い天皇が天皇である立場で作歌している作品。一方、今回の美智子さまの歌集は〈私〉という立場を大事にして纏められた歌集で皇室の歴史上画期的な所がある歌集だと思う。解説の永田和宏さんは次のようなことを述べている。

美智子さまの御歌は、皇太子妃、皇后、上皇后という特殊な立場を離れて、純粹に現代の歌人の一人として読まれるべきものであると私は考えています。それだけの技術と、なにより繊細で豊かな感性は、これまで発表されてきた多くの歌を読めば、おのずから納得していただけることでしょう。

つまり、この歌集は上皇后とかの立場ではなく一人の私人的な意味合いが大きい歌集と位置付けている。それを象徴するポイントは何の肩書もなくただ、「美智子」とだけ記された歌集の著者名に現れている。〈公〉の立場が優先される皇室にありながら、一人の人間として〈私〉の思いを托された歌は、実はより親密に国民との懸け橋になると思う。

ちなみに、美智子さまは祖母の方が「心の花」の会員だった縁からか、1946年から1947年にかけて「心の花」誌に数首

の作品を残されている。

- ・ほんのりと霞んでみえる山の裾ぼつりぼつりと菜の花がさいて
- ・人ごみの電車で折れし花を持ち心悲しきたそがれの道
- ・霧深い草の小路をおばあ様と野菜かごさげてお畠へ行く

年代から考えると十二歳から十三歳ぐらいと思われるが、その時の情景やお気持ち素直に伝わってくる作品で、この描写力や澄んだ心根は、その後の美智子さまと真直ぐに繋がっていると感ずる。

- ・三日の旅終へて還らす君を待つ庭の夕すげ傾ぐを見つつ
- ・少年の手に支へられわが植うる若木は土にしかと降さる

『ゆふすげ』の歌に戻ると昭和、平成という章立てで一年ごとに分けられた編年体で並べられている。つまり、その年に社会や個人的に何があったかと振り返りながら読むことが出来る仕組みになっている。また、皇太子妃、皇后陛下としての姿を見てきたからこそ思いを重ねられる面があり歌集の魅力になっている。

- ・苦しみも清冽に濁りあらざりき学び舎にゐてをとめなりし日

昭和四十六年の作品。苦しみも清冽であったという深い捉え方に驚かされる。逆に言うところ濁りある苦しみを今は持っているということなのだろう。美智子さまの歌はいつも前向きで優しいが、民間人として初めて皇室に入られたことなど、言葉にされない苦労があったのだとしのばれる。

- ・この国の岬も浦も照らしつつ今さし昇る朝日と思ふ
- ・薙刀の仕合終りて面取れば幼きまでの若き面見ゆ

国全体をそして国民一人一人を見つめる眼差しを感じる作品も多い。将に「おのがじし」を体現している歌集なのだと思う。